

「忠臣蔵を考える」①

群馬県立女子大学教授 北川 和秀

赤穂事件関係年表

將軍	年号	西曆	月日	事項
家光	正保二	一六四五	六・三	浅野長直、播磨国赤穂に移封
家綱	寛文元	一六六一		赤穂城完成
	七	一六七	八・二	浅野長矩、江戸本邸に生まれる
	延宝三	一六七五	三・三	浅野長矩、襲封（9歳）
綱吉	天和三	一六八三	二・六	浅野長矩、勅使饗応役を拝命（17歳）
			三・七	吉良義央、高家肝煎となる（43歳）
			二・五	浅野長矩、勅使饗応役を勤める
			四・九	めぐり（12歳）、浅野長矩に輿入れ
	元禄元	一六八八	二	柳沢保明、側用人となる
	七	一六九四	二・二	中山安兵衛、高田馬場で決闘（25歳）
			一・二六	吉良義央、年頭の賀使として御所に参内（61歳）
			二・四	浅野長矩、勅使饗応役を拝命
			二・九	吉良義央、江戸に帰着
			三・二	勅使・院使、江戸に到着
			三	勅使・院使、將軍綱吉に拝謁
			四	浅野長矩、吉良義央に刃傷。長矩、即日切腹（35歳）
			五	浅野大学、閉門。赤穂受城使任命
			七	浅野家上屋敷等収公
			九	急使、赤穂に到着
			二〇	赤穂藩で藩札引き替え開始
			二六	吉良義央、役職辞任
			二七	赤穂城中において大評定始まる
			四・六	受城使、赤穂城下に到着
			九	城明け渡し完了
			六・五	大石内蔵助、赤穂城下を退去

將軍	年号	西曆	月日	事項
	宝永元	一七〇四	二・四	幕府で評定が行われる
			三	赤穂浪士、大名四家にお預け
			四	赤穂浪士、吉良邸に討入り。義央を討ち取る
			五	赤穂浪士、大名四家にお預け
			二・五	大石内蔵助、鎌倉に到着
			二・六	大石内蔵助、川崎に到着
			二・五	大石内蔵助、江戸に到着
			二・九	大石内蔵助、金銀請払帳を瑤泉院用人に提出
			三・五	討入り予定日。將軍の柳沢邸お成りのため延期
			四	赤穂浪士、吉良邸に討入り。義央を討ち取る
			五	赤穂浪士、大名四家にお預け
			二・四	幕府で評定が行われる
			二・七	赤穂四十六士、切腹。吉良義周は信濃高島に配流
			二・二	四十六士の遺児で十五歳以上の者を伊豆大島に配流
			二・八	上杉綱憲、江戸で没す（42歳）
			二・八	吉良義央の妻富子、江戸で没す（62歳）
			二・二〇	吉良義周、配流先の信濃高島で没す（22歳）
			二・二	桂昌院一周忌の大赦により、大島配流の遺児、赦免
			二・二〇	將軍綱吉没す（64歳）
			二・二〇	綱吉死去の大赦により、浅野大学赦免
			九・六	浅野大学、五百石を賜わり、浅野家再興
			六・三	内蔵助の遺児大三郎、浅野本家に千五百石で仕官
				瑤泉院没す（43歳）
				寺坂吉右衛門没す（83歳）
				大坂の竹本座で人形浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」初演
				江戸の森田座で歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」初演

①今朝公卿拜謁のため、表にわたらせらるるころ、留守居番梶川与惣兵衛頼照は御台所御使奉はり、公卿の旅館に赴くにより、その事議するとて、白木書院の廊下にて、高家吉良上野介義央と立ながら物語せしに、館伴浅野内匠頭長矩義央が後より、宿意ありといひながら、少さ刀もて切付たり。義央驚き振むく所、また眉間を切る。与惣兵衛頼照はそのまゝ長矩を抱留しに、義央が同僚もかけ集り、義央をも引立て他所にまかる。よて公卿の拜謁も黒木書院にて行はる。長矩をば目付天野伝四郎富重、曾根五郎兵衛長賢請取、蘇鍊間杉戸の内に入れて、目付多門伝八郎重共并に徒小人目付多くつきそひたり。先義央に意趣をたゞされしに、更に寛なきよしを申により、義央は乗物にのらせ、平川門より帰宅せしめ、長矩は田村右京大夫建頭にあづけられ、館伴をば戸田能登守忠真にかへ命ぜらる。

かくて目付鈴木源五右衛門利雄、五郎兵衛長賢をば伝奏邸につかはされ、長矩が家人の騒擾を静めしめらる。親縁戸田采女正氏定も同じ事奉りてまかる。長矩が宅には目付伝八郎富重、近藤平八郎重興つかはされ、親縁采女正氏定、水野監物忠之、小姓組番頭戸田伊豆守政倚、山田奉行浅野美濃守長恒をもつかはさる。義央が宅にも高家品川豊前守伊氏、目付逸見五左衛門義永をつかはさる。

この夜大目付庄田下総守安利、目付大久保権左衛門忠鎮、多門伝八郎重共を右京大夫建頭が宅につかはされ、長矩に死をたまふ。時所をもわきまへず、ひが挙動せりとてなり。

この長矩は采女正長友が子なり。延宝三年三月廿三日家つぎ五万石を領し、その四月七日初見し、八年八月十八日叙爵し内匠頭と称し、三十五歳なりしとぞ。

また義央は罪なきに、刀疵治療すべしとの御旨を、高家畠山民部大輔基玄、大友近江守義孝、大目付仙石伯耆守久尚つたふ。(日記、寺伝、憲廟実録、藩翰譜続)

(世に伝ふる所は、吉良上野介義央歴朝当職にありて、積年朝儀にあづかるにより、公武の礼節典故を熟知精練すること、当時その右に出るものなし。よて名門大家の族も、みな曲折してかれに阿順し、毎事その教を受たり。されば賄賂をむさぼり、其家巨万をかさねしとぞ。長矩は阿諛せず、こたび館伴奉りても、義央に財貨をあたへざりしかば、義央ひそかにこれをにくみて、何事も長矩にはつげしらせざりしほどに、長矩時刻を過ち礼節を失ふ事多かりしほどに、これをうらみ、かゝることに及びしとぞ。)

〔徳川実紀〕元禄十四年三月十四日条)

*『徳川実紀』は江戸幕府が編纂した徳川家の歴史。全五一六巻。文化六年(一八〇九)着手、嘉永二年(一八四九)成立。

②去年三月、内匠儀伝奏御馳走之儀に付、吉良上野介殿へ意趣を含み罷り在り候処、御殿中に於いて当座通れ難き儀御座候か、刃傷に及び候。時節場所を弁へざる働き無調法至極に付き、切腹仰せ付けられ、領地赤穂城召上げられ候儀、家来共迄畏れ入存じ奉。上使の御下知を請ひ、城地を指上げ、家中早速離散仕り候。右喧嘩之節、御同席御抑留之御方これ在り、上野介殿討留め申さず、内匠末期残念之心底、家来共忍び難き仕合に御座候。高家御歴々に対し、家来共鬱憤を挟み候段、憚に存じ奉り候得共、君父之讐は、共に天を戴くべからざるの儀、黙止し難く、今日上野介殿御宅へ推参仕り候。偏に亡主之意趣を継ぎ候志迄に御座候。私共死後、若し御見分之御方御座候はば、御披見願ひ奉ること、かくの如くに御座候。以上 (浅野内匠家来口上)

③……(前略)……さ候はば、内匠殿を呼び参り候やう申し遣はし候ところ、すなはち内匠殿参られ候ゆゑ、拙者儀今日伝奏衆へ御台様よりの御使を相勤め候間、諸事宜しきやう頼み入る由申す。内匠殿、「心得候」とて本座へ帰られ候。その後御白書院の方を見候へば、吉良殿御白書院の方より来り申され候ゆゑ、また坊主に呼びに遣はし、吉良殿へその段申し候へば、承知の由にてこの方へ参られ候間、拙者大広間の方へ出候て角柱より六、七間もあるべき所にて双方より出合い、互に立ち居候て、今日御使の刻限早く相成り候義を一言一言申し候ところ、誰やらん吉良殿の後より、「この間の遺恨覚えたるか」と声を懸け、切りつけ申し候。

その太刀音は強く聞こへ候へども、後に承り候へば、存の外切れ申さず、浅手にてこれあり候。

我等も驚き見候へば、御馳走人の内匠頭殿なり。上野介殿、「これは」とて後の方へふりむき申され候ところをまた切り付けられ候ゆゑ、我等方前へ向きて逃げんとせられし所をまた二太刀ほど切られ申し候。上野介殿そのままうつむきに倒れ申され候。

吉良殿倒れ候と大方とたんにて、その間合は二足か三足ほどの事にて組み付き候やうに覚え申し候。

右の節、我等片手は内匠殿小刀の鏢にあたり候ゆゑ、それ共に押し付けすくめ申し候。その内に近所に居合せ申され候高家衆ならびに内匠殿同役左京殿など駆け付けられ、そのほか坊共も見及び候ところに居合せ候者ども追ひ追ひに駆け来り、取り押さへ申し候。

さて最前倒れ申され候上野殿を尋ね候へども一向に見え申さず、右の騒ぎの中に何人か介抱致し引き退け候や、その近所には見え申さず候。後に承り候へば豊前殿・下総殿など駆け付けて上野介殿を引き起こし候へども、老人の手負ひゆゑ、一向正気もこれ無く候へば、兩人して引き抱へ、御医師の間の方へ連れ行き申され候由に御座候。

それより内匠殿をば大広間の後の方へ何れも大勢にて取り囲み参り申し候。その節、内匠殿申され候は、上野介事この間中意趣これあり候ゆゑ、殿中と申し今日の事かたがた恐れ入り候へども、是非に及び申さず、打ち果たし候由の事を、大広間より柳之間溜り、御

廊下杉戸の外までの内に、幾度も繰返し繰返し申され候。その節の事にてせき申され候ゆゑ、ことのほか大音にてこれあり候。高家衆はじめ取り囲み参り候衆中、「もはや事済み候間、だまり申され候へ。あまり高声にていかか」と申され候へばその後は申されず候。

この時の事ども、後に存じ出し候に、内匠殿心中察し入り候。吉良殿を討ち留め申されず候事さぞぞ無念にありしならんと存じ候。誠に不慮の急変ゆゑ、前後の思慮に及ばず、右のごとく取り扱ひ候事は非なく候。さりながらこれらの儀は一己の事にて朋友への義のみなり。上へ対しては、かやうの議論に及ばぬは勿論なれども、老婆心ながらかれこれと存じめぐらし候事も多く候。……(後略)……(梶川氏日記)

④年始公家衆御馳走人浅野内匠頭は、松平安藝守殿の家の分かれ、高五万石が兼ねて吉良と挨拶宜しからず。殊に度々伝奏屋敷にても、吉良は高家年老の人にて、内匠殿は年若、尤も公家衆などへ挨拶等もいまだ初々しきにより、吉良を相頼るといへども、とかく吉良何とやらん敵めしく、内匠兼々存じよらる由。

然る所に三月十四日公家衆登城、その日御返答の御儀式、尤も何もしやうぞくなり。いまだ表へ起成なされざる時、大廊下千鳥の間の先の方へ吉良相詰め罷りあり。内匠頭は千鳥の間の方より来る。その席ををいて堪忍ならざる事にや、惣じて内匠頭は気短かなる兼ねて人の由、吉良を見付けて小さ刀を抜き打ちに眉間を切る。烏帽子に当たり、烏帽子の縁までにて切り止まる。時に吉良横うつ向きになるところを二の太刀にて背を切る。これも刀の寸は短く、その身は気せき、太刀先下がり、やや皮肉の間まで、長さは六寸余も切れる。疵浅し。額の疵は骨に当たり、少々疵深し。

時に御留守居御番梶川与三兵衛と云ふ人、兼ねて表向へ出ざる役柄なれども、その節、御奥方の御用聞き合わせの事これあり、右の席へ居合わせ、二の太刀切り付るところを、与三兵衛内匠を組み留むる。それより双方押し別け、内匠には大勢番人付き、吉良は高家衆の部屋まで引き取る。当番本道方は津軽意三、外科方は坂本養慶、まづ血を止め療治致すべしと大目付衆より指図これあり、薬を用ゐ外治致さるといへども、血止まらず元氣薄くなる。

これに依り、御老中御指図の由にて大目付仙石丹波守、公家衆の内、畠山下総守へ申され候は、栗崎道有を早く召して療治致すべしとの事に付き、畠山下総守より急ぎ手紙上封して御小人目付衆私宅へ右の手紙持来る由。吾はその節、神田明神下酒屋伊勢屋半七と申す者、癰腫を煩ひ療治最中の時、宿より右の封じ状急ぎ持ち来たる。披見するに

只今殿中に於いて吉良上野介不慮の儀これあり、手負に付き、大目付仙石丹波守指図のまま申し遣し候間、早々急ぎ登城これあるべく候。以上

三月十四日

畠山下総守

栗崎道有様

右のごとくの文言にて封状来る。吾ただごと存ぜず、大勢手負もこれありや、まづ急

ぎ登城致すところに、大手の御門より人止めにて、誰をも出入ひしと相止む時に、吾名を申し立て、御用召にて登城致す由申すに付き、相違なく御門々を通る。中の御門にて御小人衆の外向ひ、早く罷り越すべきの使の由、さて直ちにまづ吉良殿部屋へのぞき、見分するに、内外当番の医師、付き添ひ居り申されども、血いまだ止まず、ひたと生あくび出て、せつ死そり氣も付くべきやと思はれ、……(中略)……

一、治し方額筋交眉間の上の骨切れる。疵の長さ三寸五、六分、熱湯にてあたため洗ひ、小針小糸にて六針縫ひ、直にうすめちやを付けふたにも薬を付くる。背の疵浅し。然れども三針縫ひ、仕掛け薬右同断なり。巻木綿は幸い下着の白帷子を引きさき、随分手ぎはよく巻き包み置きて、さて部屋中血になりたる衣類を吉良挟み箱へ入れさせ、畳へも方々血流れ、穢らはしく見ゆるほどの物を吉良家来に申し付けて掃除致させ、かやうの事これあり、殿中より役人衆これへ参られ、穢れの体にて御座席へも出られがたくこれあるべきの間、随分部屋むさからぬ様にと我等ともども掃除を致し、それより吉良氣をしづめ、湯呑所より湯を取り寄せ、茶碗に食を入れ湯漬けにして焼塩少々相求め、二碗湯漬けをこれ用ふと、ひとしほ元氣常のごとくに見えるなり。

右に言ふ、ひたとあくびいで、くたびれ相見ゆるは、血のいではしりたるばかりにてはこれ無く、早朝より罷り出で、胃の氣弱く成るゆゑと考へ、彼の食を求む、御台所にて病人手負いに用ゆると申しては穢れにもなるべきや、御同所目付衆くれ申されまじき事もこれ有るべくと思ひ、右の通りにて食を求めてこれ用ふるなり。……(後略)……

(栗崎道有記録)